

「風に路を用意する」－4大学学生展プログラム2009評

廣見明彦

多摩地域の美術大学と美術系学科のある4大学の学生による青梅市街での展示も、本格的に展開するようになって3回め。青梅駅から東青梅にいたる旧青梅街道沿いの商店街や路地、青梅線北側の丘陵に沿った永山公園や社寺、住宅地などに47人が作品を設置した。宗徳寺前の踏切付近の駐車場角に一部壊れたブロック塀を廢ぎ足しブロック内の鉄筋を曲げて、塗の部分が倒れかかっているように錯覚させた井原宏路『blocken』(1)、青梅総合高校講堂脇の普段は不使用のコンクリート外階段と講堂壁のすき間を木製パネルで仮積し空間を開いた村上真之介『風に路を用意する』(2)、街路に面した久保ラジオ商会のショーウィンドウのステンレス製フレームを鏡面に見立て、その下の花鉢の中に鏡に映る容姿についての声を仕込んだ源田賀幸『変見』(3)、勝沼三丁目の児童公園内のブリートなどの上に子どもの落書きマスクを微細な立体にして潜ませた鈴木尚太(4)、住宅街の吉井戸から水を循環させるステンレス製の水路を外部へと引き出した佐藤裕(5)、西分町の旧消防団詰め所をニュートラルな空間にリフォームして、増殖や集積をモチーフとする作品を展示了八木貴史(6)。以上の6作品は、こうした市街に展示する機会に得られる多様な性格をもつ場所との関係を読み込んだ創意によって、訪れて見る者にも、その場の特性と表現を啓きえていた。

東頸寺墓地の山林で一定時間、自身が立像になって鼓動の音をスピーカーで響かせた後藤友里「遠くからやってくる」(7)は、アイデアとしては先例もあるので健闘賞か。カフェ yard で自然光と手作り映写機によって青梅のロイヤラマ・フィルムを回転映写した佐藤慎吾+半田貴功(8)は、もう少し展示設定のつめが欲しかった。それから絵画や彫刻をじかに市街に搬入展示了したケースも少なくなかったが、西分町一丁目の車庫外壁を色彩豊かな大画面で覆った大町未花(9)、渡邊晃世(10)などは、かえって絵画という虚構のあからさまなさらされ方が、新鮮に映った。中秋屋菓子店の店頭に生態環境の変容を映した細密画パノラマの屏風を飾った久保俊太郎(11)、西分神社社殿の間にビルの集積する都市図を置いた山田英和(12)、住吉神社下の日だまりに呼吸する空間を含んだ石彫を据えた越智彩(13)なども、作品の力と場所がよくかみ合っていた。

これまで以上にすぐれた作品も見られたが、例年、青梅線北側の社寺などに多い彫刻の大作が少なかったことやひと目で所属大学の教員の作品との類似がわかる作品も目についた。市街での試みは、たしか



に場所自体を表現要素とする作品向きだが、絵画、彫刻の展示も上記のように適当なリサーチと判断があれば、有効な機会になりえる。また類似の問題は、空間表現や野外展の初步的な実習なのかもしれないが、大学内で許容されても学外では望ましいことではないだろう。

(たかみ・あきひこ／美術評論家)

